**“いよいよ大学合格者現れる“**　2007.12.19(wed)

おめでとう！常葉学園短期大学保育科合格　I.K.さん

おめでとう！常葉学園短期大学英語英文科合格　N.N.さん

**”ある少女の旅立ち“**　2007.11.2（tue）

昨夜9時45分、14歳の少女が、”自分を鍛え直すため”（彼女曰く）、ニュージーランド留学に旅立ちました。今年8月15日に出会って以来、この2ヶ月半で彼女は随分変わりました。ご両親に対する態度以外は。これからの9ヶ月で彼女はまたどれだけ成長してくるか楽しみです。でも、この間ほぼ毎日接していただけに、ちょっと寂しいですね。

**”就労支援“**　2007.10.23(tue)

明日午後、静岡県産業部雇用推進室主催の「若年就労機関情報交換会」に参加要請がありまして、約2時間ほどの会議に出席してきます。スタッフの方にも申し上げましたことですが、若年の就労機関の情報を広く集めることは、若年齢層のいわゆる、ニートや引きこもりの青少年がハローワーク以外ので就労の場を知る上では確かに大切なことです。

しかし、彼らがその情報を知ったからと言って、勿論すぐ働きに出ない。事は簡単ではないから、ニート、引きこもりと言った社会現象が起こっていることは周知のことと思います。小柳教授の言葉をお借りすれば、「豊かさ」がもたらしたこうした現象には、その深い分析とその素因の解消に向けて、長期的な社会構造的な、地域・家庭改革と、個別的な心理支援、カウンセリングが必要です。

これまでここで書いてきましたことをお読み頂ければ、どんな長期的な社会構造的な、地域・家庭改革が必要か、あるいはどんな心理支援、カウンセリングが必要かはお分かり頂けると思います。その前に、まずは単に「勤労の義務」をかざしだけでは解決できないこうした現象の分析からだと思います。明日はそこからお話し、一つの提案をしてきたいと思います。その内容はここでまた述べていきたいと思います。

**“引用、伊藤・佐々木著「子供に悩まされる親　親にダメにされる子供」”**　2007.10.8(mon)

人間には羅針盤が必要。羅針盤があるからこそ、自信と余裕をもって、悠々と前に進んでいくことができる。子供にとって羅針盤は親。お母さんにとって羅針盤は、お父さん。お父さんから愛されているお母さんは、子育てにも余裕が持て、その愛情をそっくりそのまま子供に与えてあげることができる。

母性とは「無条件の保護」、父性とは「条件付の愛情」（ルールを教えるという条件のついた愛情）。勿論、父親、母親ともに、それぞれ父性、母性の両方を持ち合わせている。乳児期は充分に母性が与えられることが必要不可欠。まずは母性があって、それから父性に移っていくこと。本当に大切なのは、母性と父性の“バランス”ではなく、“順序”。人間は最初は一方的な依存から始まる。幼児時期に、十分に保護された状態、“過保護”の状態で一方

的依存を経験することによって、人間は今度相互依存ができるようになる。
　遊びが情緒を養い、年相応の人格をつくる。ヴィコツキー曰く、子供は遊んでいる時に、必ず自分たちでルールをつくっている。ルールを守れない子供は遊びに入れない。でも、年が違う子供たちが一緒に遊ぼうとする時には、小さい子供には特別救済措置をつくる。年上の子がそういうルールをつくってあげる。こうして互いのルール、確認事項をつくって遊んでいる。人間が道徳性、倫理性というものを身につけるためには遊びが必要だ。仲間とのルールのある遊び、役割のある遊び、役割を分担し合う遊びを抜きにしては、人間の中に十分な倫理性、道徳性は育たない、と。創造性は遊びの中で育つ。想像力の豊かな発達が、相手の気持ちを想像する力に発展する。人との関係をクリエイトする力も育ててくれる。
　しつけとは、意欲的に積極的にルールを守って行動し、社会的な規範を守って行動するようにしてあげること。自尊心が守られているときだけ、子供は親の言うルールを積極的に意欲的に守ることができるようになっていく。しつけで重要なのは、子供の中に「人を信じる力」をしっかり育てておいてあげること。十分な母性によって保護された子供は、親を信頼し、親子の信頼関係が生まれ、人を信じる力が育つ。大きくなった子をしつけなければならない時は、場合によっては「厳しいしつけ」が必要になってくることもある。その場合でも、親のプライドや世間体を優先させた叱り方をするのではなく、子供の自尊心を守りながら叱るようにする。

**”マザー・テレサの言葉”**　2007.9.18(tue)
　昨日 17 日の静岡新聞朝刊第５面「教育@しずおか　自立ってなんだ？」に、マザー・テレサのこんな言葉が引用されておりました。宗派に関係なく、世界中の貧しい人たちのために尽くしたマザー・テレサが日本を訪れた際、あるホームレスの多い地区を視察し、「この国に貧困はない。あるのは『孤独と怠惰』です」と漏らしたそうですね。20 年以上前の話です。
　孤独－昨夜から今朝にかけてある少女の話に耳を傾けてきましたが、確かにと感じます。勿論ご両親が揃って、経済的にも物理的にも何不自由なく育っていますが、いや、たった一つ、精神的に孤独なんですね。ご両親が気づいてくれない孤独な余りに、「家に居られない、死にたい」と訴える。あるいは、この世に生をもうけてからこの方、いがみ合い、ののしり合う両親を横目で見ながら、温かい一家団欒のホームドラマに浸たり、孤独を癒す少女。
　怠惰－勿論これは、前にも書きましたが、豊かさがもたらした現象の一つですが、激しい飢餓にあえぐアフリカやインドの人々を長く見てきた彼女（マザー・テレサ）の目には、高度経済成長時の勤勉が皮肉にも怠惰を産んできたと映ったんです。新聞の筆者も書いておりますが、怠惰に負けてしまっているんでしょうね。

**”伊藤幸弘著「体当たり子直し」より”**　2007.9.16(sun)
　１．非行の三要素　「あまったれ」「さびしがりや」「わがまま」

２．過干渉は子供を歪めるが、過保護は子供を育てる。
３．「シャツを着なさい」と言った時、子供は手と首を同じところから出して着てしまった時、親が「なんでそんなことできないの？」と言って、あれこれまた指示するのが、過干渉」。たとえ首のところから手が出ていても、そのままにして、不自由でどうしようもなかったら子供に考えさせ、それ以上のことはしないのが、過保護。過保護に育てると、子供はある時、「もう結構です。」とそこから出て行く。その時に子供は親の手から離れていく。これが、「依存から自立へ」。
４．幼児期のしつけが大切。非行というものは、幼児期の些細なことの積み重ねの結果。特に日常的に一緒にいる時間の多いお母さんは、子供の行動を見ていてまどろっこしいので、ついつい手を出して先やってしまう。子供の目を見ただけで、何を要求しているのかがすぐわかるからである。これを続けていくうちに、子供が要求していないのに勝手に「よかれ」と判断するようになって、いろいろと干渉するようになり、「おしつけ」になる。
５．子供は親が考えているよりも感受性が強いものである。「こうだ！」と決め付けられると、もう親に甘えることができない子供もいる。
６．子供が寂しいときに愛情を注がないで、自分も都合のよいときだけ話し掛ける親では、子供は親をうるさく思うのは当たり前である。自分の話をよく聞いてくれて、そこに依存できる親子関係があれば子供は親に暴力など絶対にふるわない。
７．親は我が子をどんな人間に育てようかという長期の目標を持って育てること
８．子育ては、親自身の価値観なり、人生観が全部、鏡に映し出されるように表れること。子育てではなく「自分育て」、育児でなく「育自」である。
９．子供は花、親は根っこ。「親ほど損な商売（＝見返りを期待しない）はない。」
１０．若者が茶髪にしたり派手なスタイルにしたりするのは、自分自身の存在をアピールするためである。特に学校の勉強でアピールできない子は、違う方法で自分自身の存在を主張するしかない。それが部活動でも趣味でもいいのだが、一番苦労しないですむのがファッションであるため、多くの子がこの簡単な自己主張の道を選ぶ。
１１．子供との約束事は絶対に守る。子供がルールを破ったら怒る。しかし、破られた事実に怒る。
１２．子供の理由をわかろうとせず、大人の論理や感情、立場で押さえつけると、子供の親から離れようとする力は次第に強くなってくる。
１３．家族は選べないが、友達は好きなように選べる。
１４.自分に自信があれば、本音も何でも言える。何でも言えれば、非行に走らない。
１５．好きで悪くなっている子は一人もいない。最初から弱い者をいじめたいと思っている子もいない。
１６．非行に走るとき、子供は幼児に戻っている。そんな時こそ温かく包み込んで、目標を一緒に探してやる。喜びも苦しみもともに味わう親子関係なら、子供はルール

からはみだすことなどない。

１７．幼児性―自分のストレスを解消したいため、自分の世界に依存したいためにだけで問題行動を起こす。わがままに育ったため、親に言いたいことを言い、気に入らないと暴力をふるう。

１８．少年たちが悪い意味で自分本位になっているときは、目から火が出るほど叱る。わがままであればあるほど、叱るときは徹底しなければならない。彼らは叱られた恐怖感から自分本位のわがままな感情を静めて、ごく普通の人間的な感情を表すことができるようになる。

１９．本当に親が子供と向き合って、その係わり合いの中で子供がまともになってなっていくのが一番いい。真剣に子供と向き合う姿勢を持った親に、子供が手を上げることはまずない。子供は親の姿勢をしっかり見ている。

２０．父親は逃げないでしっかり一家を守れ、母親は愚痴ばかり言わないで一家の太陽となる努力をしなさい。

２１．元のように戻ってまじめに進んでいくだけが更正ではなく、曲がったままでも自分なりに力を出し切って生きていくのが更正だ。

２２．時には親子が距離をあけて、お互いに見つめ合うことも大切である。

＊これらは、この本のごくごく一部の言葉です。是非お読み下さい。

**”問題行動に走る子供たちへの対応”**　2007.8.31(fri)

今月 15 日からの 2 泊 3 日の夏の交流合宿後から、夏期講習の合間を縫って、問題行動に走る子供たちへの相談・対応をしています。30 数年前から 10 数年そうした子供たちの対応をしておりましたが、その後しばらくはエネルギーが内にこもる不登校、引きこもりの相談・対応に終始しておりましたことから、テレビで教育子メンテーターとしてご活躍中の、元暴走族「相州連合」2 代目総長・非行カウンセラーの伊藤幸弘氏にご相談申し上げ、一緒に対応して頂いております。10 年ほど前、ある県会議員を通じてお会いする機会がありまして、長い時間お話を聞かせて頂きました。この間、伊藤さんの著書も 2 冊（「体当たり子直し」「子供に悩まされる親親にダメにされる子供」）ばかり読ませて頂きました。本当に勉強になっております。またここでご紹介させて頂きます。

**”ひきこもりの子を持つお父さん、お母さんへ　その３”**　2007.8.5(sun)

最近「教育再生」の元、様々な議論がなされておりますが、人類はこれまで何十世代、何百世代にわたって子育てをしてきたのに、いまだにどう育てたらいいのかが大きな議論の的になるほど、子育てや教育はこうすればこう育つというほど単純ではありません。ましてや私達大人が経験したことのない、この豊かな時代、どうしていいのが本当のところわかっていないのです。誰にとっても子育ては子どもが生まれて初めて経験するもので、迷いながら手探りでやっていくしかないのです。そうした姿を隠すことなく誠実に丁寧に取り組む

ことが、大人にも子どもにも「豊かさを生きる力」をつけてくれるのはないでしょうか、と小柳教授は述べています。そして、教授はその豊かさを生きる力を育むには、次の 3 つの「ぜいたく」をすることだと提言しています。

第一の「ぜいたく」は、子どもを信頼し、肯定的に見ること。自分が周囲から信頼され、受け入れられている環境の中で育つという体験ほどぜいたくなことはないのです。めざましい活躍をしたから、よい子だから価値があるというのではなく、今のままでいいと受け入れられる風土の中で、自分の存在や感覚や判断を信頼するという自らを恃（たの）む力が育まれる、と教授は言います。

第二の「ぜいたく」は、周囲の大人が大人の都合で子どもをいじり回さない、やりたいことを邪魔しないこと。自分がやりたいことに気持ちよく取り組めることは、自分の存在や感覚への信頼を養い強め、豊かさを生きる力に繋がる、と教授は述べてます。「やりたいこと」に取り組んでいくと、当然に思い通りにならないことや困難に出会い、苦しみます。しかし、やりたいがために、その壁も乗り越えていきます。そもそも「したいことをさせたら、つらいことを避けるだろう」という発想が、子どもを信頼していないのです。

第三のぜいたくは、子どもが話しかけてきたら耳を傾けること。子どもたちは、うれしいとき、驚いたとき、悲しいとき、心が疲れたり傷ついたときに、大人にゆっくり話を聴いてほしいのです。そんなとき、大人が忙しさに折り合いをつけて顔と心と耳を向けてくれるというのは、ほんとはぜいたくな体験であり、それは子どもにとっても自分が大切な存在であるんだという確信に繋がり、「豊かさを生きる力」を自ら育んでいくのです。（引用・参照：小柳晴生著「ひきこもる小さな哲学者たちへ」生活人新書版）

**”ひきこもりの子を持つお父さん、お母さんへ　その２”**　2007.7.29(sun)

小柳教授はその著書で、未だかつて人類が経験したことのない、この豊かな世界を生きるには、これまでとは違った知恵や力が必要になると説き、その力は次の 4 つと仮説しています。

その第一の力は、「あいまいな状況を探索的に生きる力」。豊かな時代には、これまでの社会のように困難や苦しみに耐えて進めば目標に到達するという、成功が約束された道が無くなったため、うまくいくかどうかわからないリスクを自分で背負い、道を造りながら進むしかないし、そうした生き方を良しとする価値観を身につけることが求められるようになったと述べています。

第二の力は、「自分に付き合う力」。あいまいな状況を生きるには、「自分が何を望んでいるか」、「どう感じているか」が羅針盤やナビゲーターの働きをし、自分で楽しみを味わい、結果を自分で評価する力も要るから、その為には自分の心の声をうまく聴けることが必要になると述べています。

第三の力は、「自分と折り合う力」。豊かさは、たくさんの可能性を提示するので、何でもできるかのように思わされがちで、しかし、現実には人は体が一つしかなく、時間は一日 24

時間しかないために、選びうるのはごく限られており、また苦労して選んだとしても必ずしもうまくいくとは限らない。従って、選べなかったたくさんのことをあきらめたり、苦労して選んだことがうまくいかないときにやけを起こさないで対処する力が必要になると述べています。

第四の力は、「内的な倫理観や価値観、センスに裏付けられた節制力」。豊かな時代は、子どもでも「巨大なテレビショッピングの世界」に放り出され、そこにはあらゆるものが魅力的にすり寄ってくる誘惑の地雷源で、一瞬にして金を失わせる投機的な誘惑や健康を損ねる薬など、危険と隣り合わせの世界であるから、自分の内なる倫理観やセンスで律していかなければならない。その知恵は、自分の声を聴き自分の内側に見つけ培っていくしかなく、そのためには、大人も子どもも「ゆっくり自分と向き合う時間」を確保することが求められていると述べています。（引用：小柳晴生著「ひきこもる小さな哲学者たちへ」生活人新書版）

**”ひきこもりの子を持つお父さん、お母さんへ　その１”**　2007.7.25(wed)

私達、50 歳代以上のお父さんやお母さんは戦後の混乱期を過ぎ、高度経済成長期に育ってきました。即ち、欠乏の時代を生きるために私達は、「頑張ること」や「努力」、「忍耐」という価値観の元に、「努力は秀才に勝る」と受験勉強にかき立てられ、「巨人の星」に代表される”スポ根”（スポーツ根性）を叩き付けられては、「欧米に追いつけ、追い越せ」と働き続けて生きてきました。それ故に、私達の世代には、豊かさの中で育っている現在の「不登校」や「引きこもり」の子供たちは、「サボり」とか「ひ弱」、「忍耐力がない」、「意欲が足りない」と映るんですね。

しかしながら、私達の価値観で彼らを見ても、彼らを真に理解することはできないんです。彼らは、その豊かさの中で生きることの難しさに戸惑っているんですね。「物と情報があふれるジャングル」は、「過酷な世界」なんです。彼らは「対処しきれない物や情報の濁流に襲われ、多様な選択肢に絡み取られ、身動きが取れない苦しみを、大人達に訴えても訴えても通じないもどかしさに絶望感さえ漂」っています。

実は私達、大人達も、「いま迎えつつある豊かな時代をどう生きたらいいのかわからないし、その知恵を持っていない」んですね。「負うた子に教えられる」という諺の如く、小柳教授はその著書で「むしろ子供たちからその知恵を学ぶ時代なのです。」と述べています。（参照：小柳晴生著「ひきこもる小さな哲学者たちへ」生活人新書版）

**”大変興味深い本を頂きました！”**　2007.7.24(tue)

モカのママさんに頂きました、小柳晴生著「ひきこもる小さな哲学者たちへ」（日本放送協会・生活人新書版）。これまで日本人が経験したことのない豊かな時代に生きる今の若者達。それゆえに、これまでの常識で今の若者達を考えてはならない。この豊かな時代を生きるには、これまで以上に人と関わる力や選択力、判断力が必要なため、従来であれば十分と

された力でも、この時代では不十分なんです。フムフム・・・すーと入ってくる文です。これからしばらくこの本について語ってみたくなりました。

**”久しぶりに日記書こうかな”** 2007.6.22（fri）

ご無沙汰しております。

カヌーの新たな練習場所の発見（大井川・接阻峡）でウキウキと思いきや、ひきこもりの若者達の相談や不登校生の対応が続き、ちょっと神経をすり減らしておりました。

子供たち（自分）が戸惑うことなく生きていける完全な社会を築かずに、欲望のままに子ども（自分）を産んでいく親に責任があると主張する。自分の可能性と将来を信じ、よりよい社会を築こうと考えられない。自分への苛立ちを現在の社会にぶつける。広い世界に目を向けず、己の世界の中でジタバタし、憂鬱な中で自己満足に浸る。そんな青年達と対峙しておりました。ねえ、しっかりと目を開こうよ！君にはホント、無限の可能性があるんだから。もっと自分を信じようよ！

**”生き様を語り合う喫茶店”** 2007.5.30（wed）

今日もMOCHA（もか）で、ホントおいしいコーヒーを頂きながら、ママさんとお話をさせて頂きました。このところ4日連続ですね。私が20歳の学生の時に会社を設立した前後から20代の頃に大変お世話になった、静大脇のFM（喫茶店の名前です）のおばさんのことを思い出しちゃいました。今でも”生き様を語り合う喫茶店”がこんな身近にあるとは嬉しい限りです。MOCHAのママさんは、ここではちょっと明かせない波瀾万丈な時期を過ごした私をじっと支えて下さったFMのおばさんのような方ですね。まさに悩める若者達の母ですね。今日はママさんの心理分析をしちゃいましたよ。

**”友、遠方より来たる”** 2007.5.26（sat）

懐かしかったです。私より先輩のやよいちゃんを「友」とは大変失礼な表現ですが、ぴったりの言葉です。でも、かの詩人がこう表現した気持ちが分かります。もか（MOCA、お店の名前です）のコーヒーもおいしかったですね。夕方、またもかに行っちゃいました。もかのママさんも素晴らしい方です。(いつかこの日誌で書きました「やよいちゃん」のことです。)

**”人との関わり”** 2007.5.23（wed）

先日福島県で起こった何とも残忍な事件。殺害した母親の頭部をボストンバッグに入れ、警察に自首してきた高校3年生。想像しただけで身の毛もよだつ事件です。肉親の母親までもが単なる物としか感じ得ない少年の心理を考えるに、その素因に人との関わり不足を強く感じます。

そんな折、先日20日、見事なまでの五月晴れの中、朝6時半に集合して、計12名で天竜・相津マリーナにカヌーをやりに行ってきました。8時半から3時間、たっぷりとリバーカヤ

ックを楽しみました。私と小５年の男の子と、リーダー2 名以外は初めてのカヌー。勿論、参加者同志もお互いに殆どが初対面。しかし、たった３時間、大自然の中、一緒にカヌーをやるだけで、人はどんどん変わるんですね。みんな、実にいい顔になっていきました。初めはカヤックを運ぶにも引率のおばさんについてきてもらう状態の子が、終わりには声をかけると躊躇することなく片付けも手伝い、みんなにお礼を言うまでに変わるんです。聞く人は耳にたこができるくらい言い続けている言葉ですが、まさに「人は群れ集う中で成長します。」またも素晴らしい一日でした。

**”多忙な新学期”** 2007.5.2（tue）

一ヶ月振りの日誌です。「忙しい、忙しい」などと言っても切りがない。忙しいのはいつものこと。そこをうまく切り抜けなければ、仕事にならぬ。なのに、今年の入塾スピードが鈍いのが気になります。ここは兎に角しっかりと教えていかなければ、そのスピードは速まらない。今年は実績に拘り、厳しく且つ強引なまでの指導に徹しようと考えてます。世間では、24 年振りの全国一斉の学力テストの是非をめぐって一部にホットな議論が。でも、それはやはりそのデータの使い方の問題と思います。豪州合宿を終え、今はその報告書作り。しかし、併行して、もう来年１年間の事業計画の作成。夢は広がります。

**” スペイン留学１ヶ月の教え子からの絶景写真”** 2007.4.2（mon）

ただ今スペイン留学１ヶ月のＯ．Ｙ．さん（神田外語大学３年生）から送られてきました「地中海の真珠」の町の絶景写真です。

**”豪州・ペンリス市　第４回春ゆめの大自然交流合宿、行ってきま～す！”** 2007.3.23（fri）

いよいよ２年ぶりに、行ってきます。今回は参加者 20 名、リーダー、スタッフ７名と小数精鋭ですが、大きな成果を手土産に、27 日深夜帰ってきます。皆さん、宜しく～。

**”「世間」考１”** 2007.3.13（tue）

日本の大人は、みんな「世間」に縛られている、と言われます。「世間」という人間関係の組み方は、西欧社会に存在しない日本独特のもののようです。

「世間」には、そこで生き、そこから爪弾きにされないために、守らなければならないいくつかの掟があると言われます。それは、1. 贈与・互酬関係を守ること、2. 身分をわきまえること、3. 他人に配慮することなどと言われます。これからまた暫く、こんな「世間」がもたらす様々な心理現象について語り合ってみたいと思います。

まずは、その掟についてお話させて下さい。1 の「贈与・互酬関係」とは、お歳暮やお中元などの付け届け、お返しのことです。西欧社会では、ものをもらっても「その場限り」のことで、誰も「お返し」は考えません。

2 は、お互い初対面の人がする「名刺交換」のことを考えて下さい。また、英語圏では、二人称は You 一つが、日本では、「貴殿」「あなた」「きみ」「お前」「てめえ」など無数あり、自分や相手の「身分」によって、その使い分けに「気を使って」いなければならないですね。

3 は、「世間の目」、「世間並み」、「世間体」の言葉の存在からお分かりのように、「世間」では、「個人の時間」ではなく、「共通の時間」を生きていますので、常に「他人に配慮」しなければならないんですね。西欧社会では、個人の時間を生きることが基本であり、神との関係で物事を決めることはあっても、「世間体」で決めることはなく、神の視点からの評価が大事です。

「世間」が生み出す様々な病理。－人前に出ると顔が赤くなる「赤面恐怖症」や、自分の視線が他人にどう映るのか気になる「自己視線恐怖症」などあり、これは、家族などごく親しい関係や、全く逆の関係のない通りすがりの人々との関係では起きません。それらの中間的な場面で生じると言われ、その中間的な場面が、まさに「世間」のことで、前回述べました通り、常に「他人への配慮」が求められ、それが強迫的に表れると、対人恐怖症として表れます。

さらに、「世間」の中で困るのは、相手がたとえ嫌いであっても、相手との対や葛藤を表に出してはならないことです。私たちはこの「世間」を離れて生きていけないと思っていますので、それを表に出せないのです。それが悲劇的な形で現れたのが、99 年に東京都文京区で起きた「お受験殺人事件」です。子供と同じ幼稚園に通わせているお母さん同士がグループをつくっていましたが、あるお母さんが、他のお母さんを嫌いだと言えなくしているうちに、心理的葛藤がつのり、相手の子供を殺せばもう付き合わずにすむと考えて、子供を殺害し、自分の実家（なんと！私の住む静岡県内ですが）の庭に埋めたという事件
です。当時この事件が報道されると、いわゆる「公園」デビューを巡る人間関係に苦しんでいるお母さんたちから。同情の声がマスコミに多く寄せられました。これは、みんながこの「世間」で苦しんでいることを示しています。

（引用・参照「児童心理」2005No820）

**”「わかる」とはどういうことか。その４”**　2007.3.10（sat）

前回までの話で「わかる」ためのは、言葉の記憶、即ち、名前の記憶ではなく、その名前の「意味の記憶」が必要である、と述べました。

その記憶にはまず、種としての記憶（遺伝する記憶、DNA に書き込まれた記憶）として、反射と情動反応があります。反射は中学 2 年生の理科（第 2 分野）に出てきますので、お分かりだと思います。情動反応とは、悲しくなると泣けてきたり、嬉しくなると笑えてくる、その反応です。

更に、記憶には、意識に呼び出しやすい記憶と、意識に呼び出しにくい記憶があります。前者は、心像化できる記憶で、うまくいけば絵や言葉に表現できる、つまり仲間に伝えることができる、陳述性記憶と呼ばれる記憶で、出来事の記憶と意味の記憶の二つがあります。後者は、九九八十一（ククハチジュウイチ）のように、「カケル」（同じ数を何回かタス）という作業を省略してそのやり方を覚えている、手と体が覚えている、心像化しにくい、手続き記憶と呼ばれる記憶です。

「わかる」ための土台となる様々な記憶の中の、「意識に呼び出しやすい記憶」について。その一つの出来事の記憶は、出来事、場所、時間、その時の感情、その時の考えなど、様々な情報の複合体です。出来事を思い出す時は、これらの情報が渾然一体となって思い出され、出来事の流れだけがビデオの再生のように心像化されるのではありません。大脳には複雑な出来事をまとめて心像化する働きがあるそうです。

二つ目は意味の記憶で、漢字や仮名、知識、人物像など、何度も繰り返すことで少しずつ作り上げていく（これは大事なことです！）事柄の記憶と、事柄と事柄の関係、人間関係、空間的位置関係などの関係の意味、カクレル、ハシル、アルクなどの動詞の概念理解につながる変化の概念の記憶があります。人間はある人の人物像の形成のように、出来事の記憶（１回限り）→類似部分の繰り返し（繰り返しの出会い）→意味の記憶（人物像）の形成という流れで、経験を蓄積していきます。また、人間は九九のように、出来事の記憶→同じ出来事（行為）の繰り返し→手順の記憶という流れで経験を蓄積していきます。

こうした記憶、中でも意味記憶や手順の記憶を武器に我々は新しい事実、新しい経験に立ち向かう体制を整えます。記憶という土台ができあがって、初めてわかるとか、わからないとかという心理的な反応（感情）が生まれます。そもそも記憶がなければ、わかるとかわからないという反応自体出現しようがないんですね。ですから、勉強はまずは教科書で、基礎・原理を納得いくまでとことん理解し、しっかりと記憶して、その土台作りをきちんとやりましょう！その上で、その土台をより強固なものにするために、問題を解いていくんですね。頑張りましょう！（完）

（参照「わかるとはどういうことか」ちくま新書）

”「わかる」とはどういうことか。その３”　2007.2.25（sun）

名前をつけるというのは、それだけでは捕まえ難い記憶心像に音声記号を貼り付け、安定させる働きです。メモ用紙や画集、辞書や新聞に、葉書や本に使われている、大きさも形も厚み、色合いも、弾力も違う視覚心像の素材、それは硬いものもあれば、やわらかいもの、ざらついたものとその触覚心像も様々であり、辞書をめくる音とカードを繰る音ではずい

ぶん違うように、聴覚心像も決して一定ではないその素材に、「カミ」（紙）という名前をつけてひとつにまとめた記号音、これは大変な発明ですね。インドのビシュヌ神の胸毛をかたどったという卍（ご存知の通り、ナチスのハーケンクロイツはそれを左右にひっくり返したものですが）、郵政省の前身・逓信省のテイシンのテを記号化した〒も記号で、名前と同じ、取り決め、約束事ですね。卍や〒はそれぞれお寺や郵便局を表す視覚性の記号ですが、その「寺」や「郵便局」は、名前、即ち聴覚性の記号、音声記号（記号音）ですね。日本人は、約 120 の音韻をもつ日本語＝言語音で、お互いの様々な記憶心像を呼び戻し、意思疎通をはかっております。メ、ペ、ベを聞き分け、同じ「メ」でも、その場の話の内容から、「目」と「眼」、「目」を聞き分け、お互いの話が「わかる」んですね。

さらに、歯痛で下あごがはれ上がった状態のＡさんが、「アカトンボ」と言っても、無口なＢさんがちょっと口をあけて、「アカトンボ」とか細く言っても、また、風邪をひいているＣさんが大きなマスクを掛けてまま、「アカトンボ」と言っても、当然物理的な音波の形としてはその大きさ、その高さ、ノイズのかぶり方、その速度などかなり違っているはずですが、心の中にしっかりと記憶心像が作られているため、それを同じ音として固定し、記憶心像と照らし合わせ、「わかる」んですね。

山鳥氏は、著書でこう述べています。おそらく言葉のそもそもの発生契機は集団に危険を知らせるとか、集団を移動させるとか、集団を集めるなど、大事な情報を多くの仲間に早く、同時に知らせ、必要な行動を起こさせるためのものだったのではないでしょうか、と。そして、言葉は社会の約束事として、カミ、エンピツなど、自分の外の世界に実存する客体を記号化し、ハシレ！ニゲロ！など、運動のあるパターンを記号化し、さらにハイ！イヤ！など、心の内在状態をも記号化してきました。言葉を手に入れたことで、私達はすべての心理現象を記号に変換（言語化）して、他人と交流する、という大変な能力を手に入れたのですね。

さて、わかる、わかったという経験の第一歩は、まずなんといってもこの言語体験です。ある音韻パターンと一定の記憶心像が結びついていれば、その音韻パターンを受け取った時、心にはその記憶心像が喚起されます。つまり、わかるためには、自分の中にも相手と同じ心像を喚起する必要があります。そして、相手と同じ心像を喚起するためには、その手段である言葉と言葉の意味を正しく（言い換えれば、社会の約束通りに）覚えておく必要があります。即ち、「わかる」は言葉の記憶から始まります。そして、言葉の記憶とは、名前の記憶ではなく、その名前の「意味の記憶」ですね。（参照「わかるとはどういうことか」ちくま新書）

**”「わかる」とはどういうことか。その２”** 2007.2.21（wed）

人はこれまでの視覚経験を経て、一つの物体の様々な角度から見た、記憶にある形=心像と照らし合わせ、それが何であるか思いを巡らせる。そうした現象、その記憶心象と一致したことが、「わかった」ことの一つだそうです。その心象の数（それは学習だと私は思いますが）多ければ多いほど、「わかる」（この場合、「識別できた」）ことに達するんですね。ど

うでしょう？「わからなかった」方も下の写真を見ると、なるほど！と「わかった」と思います。しかも、その物体を、みなさんは「マジック」という、共通の言葉＝記号として認識できたと思います。これが「わかる」、即ち「分かる」ことの一つのようです。

山鳥氏は著書で、前述した 1）全体像が「わかる」以外に、2）整理すると「わかる」、3）筋が通ると「わかる」、4）空間関係が「わかる」、5）仕組みが「わかる」、6）規則が合えば「わかる」を挙げられております。

さて、山鳥氏は著書でこんな記述をしております。

「散歩中の途中で行き過ぎる道ばたの草むらを想像してみて下さい。ここには何種類もの草たちが生い茂っています。草の形はそれぞれ独特で個性いっぱいです。しかし、草を知らない人、草に興味がない人を見ると、草は見えてはいますが（草と土、石ころの区別は認識してー「分かって」ーいますが、ヒゲグマ注）それぞれの草がそれぞれ違う形をしていることには気がつきません（それぞれ区別できません）。少し注意を集めてしばらく眺めていると、それぞれ形が違うことが見えてきます。そうすると、例えばクローバーに気がつくでしょう。あ、これクローバーだ、と、知っていることにうれしくなるかもしれません。区別し、更に固定できたのです。今度はその横にある似たような、しかし明らかに別の形の草があるのに気がつくでしょう。しかし、自分がよく見たことのある草（知っている草）ではありません。区別はできても、固定できないのです。」（一部編集してあります。）

即ち、草という名前が認識された時点で、まずは他のもの（例えば、土や石）と「分かつ」ことができたんですね。次に、クローバーという名前の花が認識できた時点で、更に他の草と「分かつ」ことができ、固定化されたんです（「クローバー」という草の記憶心像が心の中に存在することが前提ですが）。このように、認識には、草というものを土や石から区別できる位の大まかな段階から、クローバーを他の草と区別し、固定できる位の段階、クローバーの変種に気づく段階、更には、新種の草を発見するくらいの専門家の段階と、様々あるんですね。

**”「わかる」とはどういうことか。その１”**　2007.2.19（mon）

同じタイトルの本が出ています。脳の高次機能障害の臨床医・山鳥重氏が書かれた本で、ちくま新書から出ています。3 年前（だったかな？）、専修大学の指定校推薦の課題図書で、生徒からその解説を頼まれて読んだ本です。大変興味深い本で、その本も参照・引用させて頂きますが、今回は皆様との問答でこのテーマを考えてみたいと思います。まずは、みなさ

ん、どんな時に、「分かった」と感じますか？ここで一つの実験をしてみましょう？みなさんは、下の写真は何の写真と思いますか？

**”なぜ「仲間はずれ」はつくられる？その２”**　2007.2.2（fri）

これからは、別冊ＰＨＰから離れて、私のこれまでの経験から思うことです。

子ども達のストレスから「仲間はずれ」が生まれる。

子ども達のストレスが、「仲間はずれ」に限らず、「いじめ」を産んでいると思います。高学歴社会に生きる現在の子ども達は、一部に幼稚園の頃から、お受験の為の英才教育が始まり、幼児期から「学力」という重荷を背負わされます。自分が最も愛するご両親から、ご両親が果たせなかった夢を自分に託された期待、あるいは、その子を取り巻く周囲の期待、知らず知らずのうちにその波の中に飲み込まれ、必死にそれに応えようとしています。

福原愛ちゃんや宮里藍ちゃん、真央ちゃん達だけは、「学力」ではなくその分野での「トップ」という重荷を背負ってきたんでしょうね。でも、彼女らは、それをストレスと感じながらも、それを克服する努力で（いや、かなりのストレスだったかもしれません）それを勝ち取っています。

しかしながら、普通の子ども達は、その「学力」という重荷が真ん丸だった心の風船にのしかかってくれば、たとえそれが自分が求めたものであっても、子ども達の心にはストレスになり、心の風船が横っちょに飛び出して膨れ上がり、いずれはそのはけ口を求めてくるんですね。中には、スポーツ少年団のコーチや監督から浴びせられる罵声からストレスになったケースもあります。そのはけ口が、「いじめ」となって出る場合が多いと思います。

**“なぜ「仲間はずれ」はつくられる？そのＩ”**　2007.2.1（thu）

先生が「仲間はずれ」をつくっている。

これは、よくありますね。教育に携わる者として、戒めなければならないことです。即ち、「キミはまったくノロマだね」とか、「忘れ物大王だね」などという教師の言葉をきっかけにあだ名がつけられ、「先生が言うんだから、ぼくらだって言ってもいいんだ」という感覚になって、みんなで「仲間はずれ」をつくってしまうんですね。

「小さな失敗」をはやしたてる。

誰かが間違って何かをしてしまったときに、それを見つけた子が、「いーけなんだ、いけないんだ！」とはやしたて、それに対して周りの子供たちも同調したりすることがあります。

小さな失敗に対して、それを許す「まあ、いいか」という寛容さをクラスにつくっておかないと、仲間はずれが容易に始まってしまう危険性があります。(参照「別冊 PHP　2007.2)

**”東進衛星予備校藤枝駅前校の受験生諸君＆我が娘へ”**　2007.1.29（mon）

いよいよ大学センター試験当日だね。
君達に昨日送ったメール通り、試験開始のブザーが鳴ったら、まずは深く深呼吸しよう！そして、これまで3年間に渡り切磋琢磨して身につけてきました学力をフルに発揮して試験問題に挑もう！分からなくなったら、もう一度深く深呼吸しよう！必ずや解法の糸口が見えてくるはずだよ。頑張ろう！

**”教室を掃除してましたら、こんなイラストが！”**　2007.1.26（fri）

（「小さな人間たちの詩」に掲載させて頂きました。）

**”いじめから自分を守る”**　2007.1.24（wed）25(thu)

このところ新たに2件のいじめの相談を受け､学校関係者と共に対応し始めております。そんな折、別冊 PHP2007 年 2 月号を読んでましたら、表題に関する文がありましたので、みなさんのよいアドバイスになるかと思いまして、ここに引用させて頂きます。セルフディフェンスコミュニケーション開発代表理事・横地操氏が書かれた文です。

私の方で、少し文の順序を変えさせて頂いたところもありますので、ご承知下さい。その別冊 PHP もお読み下さい。

1.自分を守るには、嫌な気持ちを相手に伝える。

自分を守るには嫌な気持ちをはっきり、相手に伝えることが大切です。嫌な気持ちを曖昧にしていると、「いじめ」に繋がっていきます。

A「私、うなぎ、大好きなの」

B「えー！うなぎなんて、気持悪～い！」

好きなものを「気持悪～い！」なんて言われたら、誰だって嫌な気持ちがします。

A「でも、好きなの。そういう言い方は傷つくから、やめてほしいな」

と言えばいいのです。「嫌な気持ち」になったことを、冷静に優しく伝えます。あらためて言われると、冗談や軽いつもりで言ったＢさんも、

「ごめんね。そんなつもりじゃなかったんだ」

と、優しく返してくれます。「嫌な気持ち」になったことを伝えないと、ＢさんはＡさんが嫌な気持ちに気づかずに、そして、からかわれることを気にしない子だと思うかもしれません。

この場合、「冷静に優しく伝える」ことが重要です。もし、怒ってけんか腰で伝えたら、ホントにけんかになってしますね。

2. 上手に断る言葉と態度。

A「ほしい物があるから、一緒に万引きしよう」
B「万引きは、まずいよ」
A「万引きは私がやるから、あなたは一緒に来てくれるだけでいいの」
B「でも・・・」
A「こんなこと、頼めるのは、あなたしかいないの。私たち、親友でしょ！」
B「うん・・・」

悪いことに誘われた場合は、優しく言っても効果はありません。いい加減な返事をしていると、「一緒で来てくれるだけでいいから」と連れ行かれ、見張りをさせられてしまいます。最初は見張りでも、次回は万引きを強要されます。同じ悪いことをすることで、告げ口や裏切りをなくし、仲間から抜けられなくさせるのです。そのため、悪い誘いの場合は二度と誘われないように、強い意志を伝えなければなりません。

A「ほしい物があるから、一緒に万引きしよう」
B「私はやらない」
A「万引きは私がやるから、あなたは一緒に来てくれるだけでいいの」
B「私はやらない」
A「こんなこと、頼めるのは、あなたしかいないの。私たち、親友でしょ！」
B「私はやらない！親友でも、これは別だよ！」

このように、悪い誘いを上手に断るには、次のようにします。

1）相手の目を見て、強い声で、はっきり断る。

悪いことに誘う人は、目をしっかり見られるのが苦痛で、強い意志が伝わります。

2）何を言われても、同じ言葉を繰り返す（やらない、やらない、やらない）

同じ言葉を繰り返すのは、相手に隙を与えないためです。「お母さんにばれたら、怒られるし・・・」→「遠くの店にするから、お母さん来ないし大丈夫だよ」→「今日はクラブがあるし・・・」→「じゃあ、明日はクラブがないから、明日なら大丈夫だよね」といったように、言い訳すればするほど、説得させられ、追いつめられて、よけい断りにくくなります。

3）繰り返すときは、気持ちの言葉を使う（やりたくない・嫌い・嫌だ・興味がない）。

感情や気持ちの言葉を言われると、隙がなく、誘いにくくなります。「嫌い」なことを「好き」にする説得は難しく、言い続けることで根負けして、相手はあきらめるのです。また、「親友でしょ」「友だちでしょ」と言われると１、子どもは弱いもので、「罠の言葉」です。「親友という罠の言葉」に怯まず、強気に「親友だよ。親友でも、このことは別だよ！」と断ります。「百円ちょうだい」「あの子を一緒にいじめようよ」などと言われたときもこの方法で断れます。

さらに、「弱虫～！弱虫～！」などと、からかいながら後ろからついて来る場合は、後ろを振り向き、立ち止まり、大きな声で「やめろ！｝と怒鳴ります。いじめっ子は、抵抗しないと思ってからかっているため、びっくりします。時には強気で抵抗することも必要です。

追伸：ホントに具体的な対処法を述べた文ですね。24 日、静岡新聞の社会部の記者からいじめのことを含め、発表した教育再生の第一次報告について電話取材を受け、25 日の静岡新聞朝刊 31 面その関連記事に、私のコメントが出ちゃいました(＾＾;;;;・・・ここではいじめから自分を守ることについて書きましたが、私まずはいじめが出ない学級運営、社会づくりを早急に着手すべきだと思うんです。

**”いよいよ大学センター試験”** 2007.1.20（wed）

東進衛星予備校藤枝駅前校の受験生諸君＆我が娘、いよいよ大学センター試験当日だね。君達に昨日送ったメール通り、試験開始のブザーが鳴ったら、まずは深く深呼吸しよう！そして、これまで 3 年間に渡り切磋琢磨して身につけてきました学力をフルに発揮して試験問題に挑もう！分からなくなったら、もう一度深く深呼吸しよう！必ずや解法の糸口が見えてくるはずだよ。頑張ろう！

**”蟹問答”** 2007.1.9（tue）

「児童心理」（2005no.832）を読み直しておりましたら、大変興味深い論文（平野直巳北海道教育大学岩見沢校助教授著）に出会いました。氏が小さい頃謎掛けの部分を暗唱するほど親しんでおられた「蟹問答」という民話を例にして述べられた論文です。

「大足二足(たいそくにそく)、両足八足(りょうそくはっそく)、二眼天眼通(にがんてんがんつう)にして、色紅(いろべに)とは、これ何者（なにもの）？」と道行く人に問答しては、答えに窮する人を喰らうという赤面の大入道（大化け物）がいて恐れられていた。

ある日通りすがりの僧侶が、この大入道に襲われて問答を仕掛けられた。この僧侶は機転を利かせて（「両足八足」から 8 本足と分かり）、「お前はカニだな」と答えたところ、赤面の大入道はカニの姿に戻った。周囲を不安と恐怖に陥れていた化け物とは、自分が何者なのかを知りたいと助けを求める一匹のカニに過ぎなかった。

この僧侶の対応が、子どものサインに気づいたときの対応に通じると氏は述べておられ、失礼ながら私も全く同じ思いです。以下、引用混じりの文で述べさせて頂きます。

即ち、この「蟹問答」の僧侶がカニからの問いかけ（サイン）に関心をもってその意味するところを考えて応答したように、私達が子どものサインに気づいた時、どうするか落ち着いて考えるためには、サインに出会った時にどうなるか、どんなことが私達の心に起こるか知る必要があります。この「蟹問答」は、そうした人々の心の動きについても描いています。即ち、切実であるからこそ鬼気迫るサイン（蟹からの問いかけ）に往来の人々の心は圧倒されて動揺し、助けを求める相手（蟹）に不安や恐怖で怯えた眼差しを向けてしまうのです。

子どもは自分の心身に生じる動揺、不安、苦しみなどを思いがけない振る舞いや態度（例えば不登校）で伝えます。こうしたサインは子どもの周りにいる人々の心に大きなインパクトを与え、心配も深く、感情は否応なく高まりやすくなり、血相を変えて叱りつけたりすることもあります。そして、それだけに留まらず、程度の差こそあれ、動揺する周囲の人々の

眼差しは、サインによって伝えようとしている苦悩のほかに、もうひとつの苦悩、即ち、自分（子ども）が頼りにする人（周囲の人々）が自分のサインによって苦しみ、怒り、怯え、悲しむ、その姿を子どもに与え、また子どもがそれに苦しむことになってしまいます。

以上のことをふまえて、子どものサインに適切に応答するポイントは、身近で直接関わる大人達が”安心して”子どものサインに思いを巡らし、子どもと共に試行錯誤することです。しかしながら、「蟹問答」の僧侶のように自分の心の中に吹き荒れる不安や恐怖をたった一人で抱えて、冷静に子どものサインの意味に思いを巡らせることは至難の業です。ましてやジグソーパズルのような子どものサインの意味する答えを見出すためには、私の経験からもたくさんの試行錯誤の関わりが必要になると思います。また、本論文で述べられているように、そのためにも子どもと関わる親や教師にはあきらめない勇気が必要ですし、更には、こうした身近で子どもを支える者（親や教師）の心理を理解して、温かく励ましてくれる周りの人々（親や教師を支える人々）の支えが必要だと思います。

こう考えていきますと、子どものサインを解くカギは、その子どもの親や教師が握っているだけでなく、むしろこの親や教師を取り巻く人々も同じようにカギを握っているんですね。

これも氏が述べられておりますが、少なくとも、一番近いところで子どもと関わる人達の苦しみのサインを読みとろうとしないままに、「養育の問題だ」「教師の力量の問題だ」と脅かしたり、「親だから、教師だから、・・・すべきだ」と理想や原則を振りかざして、彼らを更に窮地に追い込むことだけはしたくないものです。

**”明けましておめでとうございます。”** 2007.1.1（mon）

新年明けましておめでとうございます。旧年中は大変お世話になりました。

ここ数年事業を初めて28年振りに経営的に厳しい年を過ごしましたが、一昨年の暮れから当社の経理部門を自ら担当しましたことも功を奏し、お陰様で昨年度から再び黒字経営に転ずることができました。今年は再び更なる飛躍の年に致したく思います。今後とも宜しくお願い申し上げます。